

INTERVIEW

自治医科大学地域医療学センター公衆衛生学部門 教授
中村好一先生



日本の「健康」を支える 医師として

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

学生時代から公衆衛生一筋に

山田隆司(聞き手) 今日自治医科大学地域医療学センター公衆衛生学部門に中村好一先生を訪ねました。同じ自治医大の卒業生として、現在自治医大で活躍されている先生方とはいろいろな面で力を合わせていきたいと思っておりますが、特に地域医療という観点からは先生の専門の公衆衛生というのは切り離せない非常に重要なセクションだと思っております。

まずは先生の経歴をお話いただけますか。

中村好一 私は1976年に自治医大に入学しましたが、当時は高校で理系のクラスにいて成績がいいと医学部に行くという感じで、あまり考えずに入学したのです。ところが医学部というのは理系だから理論的などころだと誤解していましたが、入ってみたら全然違う。当時はEBMとい

う考え方はなかったし、オピニオンリーダーの先生がこう言えばこうだという感じでした。それでやめようと考えていたのです。

山田 学生時代に？

中村 はい。自治医大でなければ恐らくやめているか、学部を変えていたと思います。しかしご存じのように自治医大は卒後の義務を条件に入学金や学費が免除になるので、やめるにはお金がかかる。普通の大学だと、経済的理由により学業を断念するのですが、自治医大は経済的理由により学業を断念できなかったわけですね(笑)。

そういう中で、臨床をしたくないというのがあったのと、もう1つは、お酒が好きだったので、公衆衛生のセミナーに行くと終わったあとに毎

回お酒を飲ませてもらえるというのがあったのですね。柳川 洋先生が教授としていらっしたし、そこに入出入りするようになって、こういう世界もあるんだということを知りました。

1982年に卒業して、臨床研修をせずに1年目は当時東京にあった国立公衆衛生院に行って、そのあと出身の福岡県に帰りました。県では県庁の衛生部、あるいは保健所に医師として勤務しました。途中1年間、後期研修で大学に戻りましたが。

福岡県では、私が卒業した時には3人だったので、1人くらい行政の方へ行ってもいいだろうというのと、その当時は保健所のドクターの定員も欠員だらけで、医師がいないところがへき地だとするなら、福岡県は少なくとも保健所もへき地だろうということで行かせていただきました。そうこうしているうちに、柳川先生から「そろそろ帰って来なさい」ということで、まだ義務年限が少し残っていたのですが、県に交渉して89年にこちらに戻ってきました。そのあと91～92年は米国のテキサス大学に留学させて

いただきました。

山田 自治医大の公衆衛生に在籍していたままですか。

中村 そうです。そして柳川先生が退任されたあと、99年から教授ということで今にいたっています。

山田 では学生時代から義務内を通して公衆衛生一筋という感じだったのですね。

中村 そういふところがありますね。臨床医学の世界も今ではEBMなどによって、少しは論理的になってきたのかと思いますので、今、医学生だったらひょっとしたら臨床をやっていたかも知れないという気もしますが。

山田 先生が公衆衛生に惹かれたのは、公衆衛生という学問自体がロジックだということですか。

中村 それもありましたし、疫学自体がとても好きだったのですね。それと当時予防医学をやる医師があまりいなかった。臨床医学をやる医者は大勢いましたが、人がやらないことをやってもいいのではないかという気もありました。

川崎病研究が遺したもの

山田 先生は公衆衛生の中でどういうことをやりたかったのですか。

中村 卒業してすぐにある大先生から言われたのですが、臨床医学というのは目の前にいる患者さんを何とかしなければいけない。例えば救急などはその典型ですよ。何とかしなければいけないから「これは自分の手には負えません」とか「専門外です」と言うことができる。しかし公衆衛生というのは、ひと晩教科書を読んで勉強する時間がある。だから専門外と言ってはいけない、何でも受けなければいけないのだと言われました。それが頭の中に残っていて、そうい

う意味では今までの研究についてもそう思ってやってきました。

山田 拒まず、断らず。

中村 はい。私は今学生にも次のような話をしています。「健康上に問題を持った個人が何とかしてくださいと来るのに対応するのが臨床医学。ところが健康上の問題を持った社会が何とかしてくださいと言って来るのが公衆衛生、あるいは社会医学で、それに対応する必要がある。ただし、臨床医学の場合は患者が病院に来てくれるからいいけれど、社会は教室に来ないから、こっちから出て行くしかない」と。今、いくつかの